



辻邦生  
異国から



晶  
文  
社

異国から

一九六八年八月三〇日初版

一九七五年八月二五日二刷

著者辻邦生

発行者中村勝哉

発行所株式会社晶文社

東京都千代田区外神田二一―一二二

電話東京二五五局四五〇一(代表)・四五〇三(編集)

振替東京六二七九九

堀内印刷・美行製本

ブックデザイン雲野良平

○一九六八年(検印廃止)落丁・乱丁本はお取替えいたします

辻邦生(つじ・くにお)

一九二五年東京に生まれる。東京大学文学部  
仏文学科卒業。五七、六一年パリ大学留学。

著書目録

『絶跡にて』(長篇小説)

『モノ』(みずす現代美術)

『夏の螢』(長篇小説)

『小説への序章』(評論)

『安土往還記』(長篇小説)

『城・夜』

新潮社

みずす書房

河出書房

河出書房

筑摩書房

河出書房

辻邦生  
異国から



晶  
文  
社



異国から——辻邦生短篇集

目次

旅の終り

ある晩年

空<sup>から</sup>の王座<sup>みくら</sup>

ある告別

見知らぬ町にて

蛙

影

7

23

95

135

165

185

191

異国から

- I 西欧の光の下
- II パリの日々
- III スペインのかけり
- IV シチリアの夏の旅
- V チロルの冬旅
- VI シャルトル幻想

後記にかえて





旅の終り

旅の終りに予定していたその町についたのは、もう夏もほとんど過ぎさろうとしているころだった。

私は、観光客や避暑客でにぎわう町の広場を、並木のおとす濃いかげのなかに立って、ながめていた。日ざしは強く、町は白くまぶしかったが、地面におちるかげは濃く、風はさわやかに吹きすぎていた。それが海からの風であることは、誰にも容易に知ることができた。

私<sup>シ</sup>がそこに立っているあいだにも、何台かの馬車が近よってきて、浅黒く日焼けした御者たちが、「旦那<sup>シマノブ</sup>」と声をかけていった。なかには、ながい鞭で地面を強く叩いて、私の注意をひこうとする

御者もいた。そんなとき、鞭は、鋭い、乾いた、きびしい音で鳴った。

木かけには何人かの男たちが休み、新聞売場では、若い女が通りがかりの男たちの冗談に、肩をすくめたり、笑ったりしていた。町は正午に近く、暑かったが、まだ朝の気分がのこり、町全体に休暇の気分がただよっていた。

新聞売場の前に、バスの乗り場があり、広場をまわって入ってくる大型バスが、圧搾空気の音をたててドアをしめると、またそこから出ていった。

バスからおりてくる乗客のなかに、妻を見つけたのは、発着するバスの数を、いい加減かぞえあきたときだった。

「ごめんなさい。おそくなっちゃって。」妻は汗ばんで、いくらか興奮していた。

「でも写真がとれたのよ。まさかと思っていただけで、思いきって交渉してみたの。やっぱりお金がほしかったのね。五百リラ出したら、手のひら、かえすみたい。なんだか、悲しくなっちゃった。」

「いいじゃないか。こっちは写真さえとりさえすればいいんだから。で、石棺は、うまくとれた？」

「明るい部屋だから、たぶん大丈夫だと思うわ。前からも、斜めからも、沢山とってやった。」

「やけにならなくてもいいさ。」

「やけじゃないのよ。こんなに、とってみても、あの石棺の美しさなんて、とてもとりきれるものじゃなくてよ。それに、誰にも、わかってもらえそうもないし……。」

「ぼくだって、よくわかりそうにない。」

「でも、それはいいものなの。あんないいものには、めったに、ぶつかれるものではないのよ……。  
で、あなたの方は？」

「ジュゼッペの細君はいなかったよ。」

「それじゃ、子供たちだけだったの？ 大へんだったでしょう。」

私は、妻が美術館で石棺や彫刻の破片のあいだで、メモをとり、図写しているあいだ、ジュゼッペの家にいったみたのだった。ジュゼッペは仕事に出、細君は朝の買物に出かけていて、十二歳のマリアが、小さな三人の弟妹を遊んでやっていた。路地の奥の家の二階で、天井は高く、小ざっぱりしていたが、家具は古く、飾りらしいものといつては、壁にかけた聖母像ぐらいのものであった。マリアは眼のふちに蒼味を帯びた、無口でやさしい娘だった。私は片言のイタリア語で「お父さんは？」「お母さんは？」「何をしてあそぶ？」などといつてみた。一番下のアドルドは栗色の捲毛の可愛い子だったが、どうしても椅子のかげにかくれて、出てこなかった。マリアが私に挨拶させようとする、こんどはマリアの背なかにかじりつき、顔をかくして、手だけ私のほうにのびし、ちらりと私を見、手をにぎると、また椅子のうしろに逃げてしまった。上の二人は、それを心よげに笑って、口々に、アドルドは何とかと叫んだ。

それでも私たちはすぐ友だちになってしまった。私は折り紙をおり、かぶとをつくって四人の子どもたちにかぶせ、最後に、狼ごっこをはじめた。私が狼で、森のなかからあらわれる。マリアが、

弟妹たちに、物語でも話すような調子で、情景を描写する。と、子供たちは、真剣な顔をして、テーブルや椅子のかけにかくれ、最後に、悲鳴をあげて、マリアの身体にしがみつくのだった。

騒ぎがひどかったために、下から、門番の細君が、何か大声でどなった。マリアは階段のうえから「スクーズ。スクーズ。」といった。私は、自分がすこし度をこしているのに気づいて、マリアに、同じように「スクーズ」といってやった。マリアは笑って「いいのよ」という風に首をふってみせた。

私たちがジュゼッペと知りあったのは、妙な偶然からだった。この町にくる前に、私たちは一晩だけC\* \*の町にとまって、その古代の遺跡をみることにしていた。ところがC\* \*はちょうど宗教会議で、町じゅうが照明され、教会は豆電球で飾られ、どの通りも雑踏し、行列がうねり、ホテルはどこも満員だった。私たちはほとんど夜になってからC\* \*だったので、急に予定を変えることもできなかった。私は、夜のあいだ、祭りを見物し、翌朝の一番列車でS\* \*にゆくことを提案した。C\* \*からS\* \*までは二時間たらずだし、一番でたてば、七時には、うまいコーヒーと白いシートにありつけるといふわけだった。しかし祭りが終わったあと、夜明けまで、駅の待合室で過ぎなければならなかった。私たちは、そこで知りあった男から、S\* \*にある格安のパンションを紹介してもらった。しかしその場所はS\* \*の町の郊外で、ようやくそこまで辿りついてみると、すでに何年か前から休業しているというのだった。

疲労のうえ、朝になると、急に気温がのぼり、私たちは目くらみそうだった。とりあえず、郊外

の小さなキャフェに入ったのだが、そこにたまたま来ていた衛生監督官が、ジュゼッペだったのだ。彼は私たちにジュースをおごってくれ、町のホテルを教えてくださいました。ホテルの名は「グラン・ブルタニア・ホテル」だった。妻は私の耳もとで「上等なホテルじゃない？ 大丈夫？」といった。「今ならコンティネンタル・ホテルだつてとまる気になるよ。」私はいった。

私はジュゼッペのために似顔絵をかいてやった。勤務時間のあいだ、見知らぬ外国人の前で、こりともせず、ポーズをとっている男が、衛生監督官だと思つと、なぜか笑いがこみあげてきてならなかった。

しかしとも角、グラン・ブルタニア・ホテルは町の中心地近かったが、雑貨屋の二階にある五間ほどのパンシオン風のホテルにすぎなかった。ただ部屋が大きく、家具が古めいていて、昼間でも鎧戸をおろした室内は、涼しく、清潔で、奥の方から風がよく吹きぬけていた。

ジュゼッペは勤務がおわると、私たちをギリシアの遺跡に案内するといつてきかなかった。実直な男で、暗い、皺の深い眼の、浅黒い禁欲的な顔をしていた。

妻はよく「こんなにしてもらつて悪いわ。」といった。

「好意だよ。受けとくべきさ。それに、似顔だつてかいたんだ。」

「あなたの似顔絵なんかじゃ、悪いわ。」

「あれだつて好意だぜ。」私はいった。

私はイタリア語はまるでわからなかった。妻がジュゼッペの言葉を私につたえてくれた。

「シニョーレはまるでわかりませんかね。」ジュゼッペが残念そうにいった。

「ええ。ボジョルノ、シニョーナへ今日は、お嬢さんぐらいいですの。」妻がいった。ジュゼッペは笑った。

「私の妻は映画館で働いているんですよ。切符を売っているんです。夜、私たちは割引で見られますよ。今夜あたり、どうです?」

「夜は、休まないと、翌日働けませんもの。」妻がいった。

「私の妻に会って下さると、大喜びするんですが。そりゃいい女です。善良で、四人の子持ちで、私を愛しています。」

「ぜひ会いにゆきます。アダルドにもね。」

「アダルドも他のもマリアをしましたっていますし、マリアは母親を愛しているんです。でも、夜は、どうしても駄目ですかね。」

「ありがたいけれど、休まなければなりません。ながいこと旅行しているものですから」

「じゃまた見にいつてやって下さいよ。あれはいい女なんです。自分の知りあいの日本人がきたなんて、そりゃ誇りに思いますよ。」

私は、そんなことで、妻が美術館にいつているあいだ、ジュゼッペの家によってみたのだった……。

夕方、私たちがホテルで休んでいると、ジュゼッペがアダルドを肩車にしてやってきた。小さなアダルドは父親のあたまの後に顔をかくして、身体をよじり、なかなか顔を見せようとしなかった。



「これから映画にいきます。」

「マリアたちは……?」

「他の今夜は留守番です。これは母親のそばにおいておきます。」

「マリアによろしくいって下さい。」

「じゃ、さよなら。」

「さよなら。」

私は階段の上でアダルドに「Ciao」といった。アダルドはすばやく顔をあげ、笑顔をみせると、また父親のうしろにかくれた。私たちは父子が細い階段の下に消えるまで、そこに立っていた。

夜になって、風がとまり、妙にむし暑かった。

となりのベッドで妻が寝がえりをうった。

「眠れない?」私は声をかけた。

「あついわね。」妻がいった。

「映画にいったほうがよかったね。」

「私たち、明日があるんですけど、休まなくちゃ……。」

「でも眠れないくらいなら……。」

「横になるだけでも休めるわ。」

私は黙って天井をみていた。天井は暗く、高かった。しかしむし暑く、風はまったくなかった。